

平戸・松浦史料博物館の成立と松浦氏の歴史

木田 昌宏

平戸市にある松浦史料博物館は、昭和三十年（一九五五）十月、松浦家第三十九代当主松浦隆陸氏の英断により、広大な敷地、豪壮な建物、膨大な史資料の寄贈を受け、財団法人・登録博物館として設立された郷土色の濃い、人文系の博物館であり、平成二十四年十月、公益財団法人に認定されている。敷地は約八三〇〇平方メートル。此の地は十七世紀初頭オランダ、イギリス貿易が行なわれていた頃、平戸藩主の政庁兼御館（中ノ御館）が在った所で、裏山は松浦氏第十一代松浦持が所領地小値賀島から平戸に移り築城した中世の山城館山城跡である。この一帯は歴史的にも貴重な場所である。

現在の建物は廃藩後、旧平戸藩主の邸宅として、明治二十六年（一八九三）に竣工したもので、当初の地名に因み、「鶴峯邸」と呼ばれた。現在は、ほぼその仮を博物館として利用している。

主な展示場は、元の謁見応接の座敷があった千歳閣である。他に玄関棟、千歳閣、書院造りの和室九草齋もあり、平成二十二年、長崎県有形文化財（建造物）に指定された。



松浦史料博物館（大門・玄関棟・千歳閣）

又、館庭の一隅には草庵の茶室「閑雲亭」がある。この茶邸は本邸の建造と同時に、最後の藩主第三十七代松浦詮（号心月）の設計により建造された。

第二十九代松浦鎮信（号天祥）は、茶の道を研鑽し、片桐石州が創始した石州流を基本にして、武家の茶道「鎮信流」を興している。この「閑雲亭」は鎮信流の道場として現在も使用され、宮様、諸外国の大使、領事などの貴賓が、しばし茶室の静寂を楽しんでおられる。茶室は一般の茶会にも利用され、美味しい抹茶や復元菓子を提

久以降、代々その子供を松浦の領内要地に分封し、逐次同族組織が形成されたが、共和的、合議的な武士団の結合体で、俗に松浦党と呼ばれるようになった。

第十五代松浦定は、後醍醐天皇の建武中興に貢献し、鬼肥州と称され、天皇存命中南朝に忠勤を励んだ。（下賜の直垂がある。）

第二十代松浦芳父子は、近隣領主たちより、当時の居城白狐山城の攻撃を受け、相次いで戦死したが、第二十一代松浦義によって回復し、更に近隣の領主を攻め、領土の拡張に成功している。

第二十三代松浦弘定の時、田平の兄昌との不仲が原因で、昌は有馬を頼って船出した。後年昌は有馬、大村ほかの連合軍で平戸を攻めたが、弘定は難を遁れ、筑前の大内氏を頼った。大内氏の調停により弘定は再び平戸、田平を領することとなり平戸に帰った。將に危機存亡の時であった。

第二十五代松浦隆信（道可）の時代になると、佐世保、相神浦、早岐、杵岐等も併有し、次第に戦国大名に位置づけられた。隆信は十六世紀中頃より、明国の海商王直を優遇し、海外の利益を取め、更に王直の手引きによりポルトガルとの貿易、キリスト教の布教も行い、西欧文化導入の県下に於ける最初の窓口となった。

第二十六代松浦鎮信（法印）は、豊臣秀吉を援助し島津平定、朝鮮出陣に武功を立て、次いで江戸幕府に移行し、近世大名として、幕藩体制の中に加わった。

江戸時代初期、松浦藩はオランダ、イギリス貿易を独占し、寛永十八年（一六四二）オランダ貿易が長崎出島に移されるまで、国内では「西の都」ヨーロッパ諸国からは、国際貿易港「フィランド」として繁栄を極めたのである。

その後、貿易の利を失った第二十九代松浦鎮信（天祥）と、歴代の藩主は、内政に重きを置き、各地に新田を拓き、殖産を奨励する等藩勢は発展したので、幕府の巡検使より善治良政を激賞された。

幕末、国内に勤王佐幕の論が沸騰した時、最後の平戸藩主松浦詮は大義名分を明らかにし、明治維新の樹立に大いに貢献した。第四十一代の現当主松浦章氏に至っている。今に至って二〇〇年の歴史と文化を伝え保つ家柄は希有なことである。（平戸・松浦史料博物館顧問）

風信

〇十一月三日は「文化の日」であり長崎市でも此の記念日に因んで各種の行事が行われた。

供している。閑雲亭は九州の地にふさわしい、開放的な茶室で、国の登録有形文化財（建造物）に登録されている。

本館所蔵の史料は国指定重要文化財一件、長崎県指定文化財十九件等を含め、三万点余で、代々松浦家に世襲秘蔵されたものを主にしている。収蔵史料は什器類、文書類、図書類に大別され、研究者、学生、一般好学者等夫々の分野の閲覧者の来館が多い。

特筆すべき史料は、第三十四代松浦清（号静山）公著述の二七八冊におよぶ『甲子夜話』（県指定文化財）であるが、他に静山が収集した膨大な和漢籍、貴重な輸入洋書類、外国貿易に関する器物が多数ある。これらは静山が創始した藩校「維新館」において、藩の子弟の教育にも充てられたことと思う。

次に松浦家当主、藩主の記録史料より、主な人物を紹介する。

平戸松浦氏の始祖は、第五十二代嵯峨天皇・第十八王子融公で、平安時代の弘仁十三年（八三二）に誕生、源の姓と、家紋三星を賜わり臣下になった。京都鴨川のほとりに居を構えたので、世に河原左大臣と呼ばれた。藤原定家の小倉百人一首に、河原左大臣の名で、和歌一首が撰ばれている。京都の菩提寺清涼寺の墓側の説明板に、『源氏物語』の主人公光源氏は、融公をモデルにしていると記されている。（松浦史料博物館に融公の肖像画がある。）

第五代渡辺綱は摂津国（現大阪）の渡辺に居住したが、源頼光の四天王の一人として、鬼退治の逸話は有名である。綱は正暦年間（九九〇年代）、頼光に随行し、肥前唐津岸嶽付近の叛賊を平げた。これが松浦家の祖先が、肥前国に関わりを持った初めである。（博物館に彩色の肖像画がある。）

第八代源久は、延久元年（一〇六九）、朝廷の命により、御厨検校として、肥前国今福に至り、検非違使に任命され、上・下松浦郡と彼杵郡の一部、杵岐島を治めることとなった。このとき地名に因み初めて松浦姓を名乗った。これが松浦氏のおこりである。

〇長崎市内には、国指定の国宝建造物が九州全域に六棟しかないのに其の半数の三棟があるので其の保護保存についての会議が先日あった。其の建造物とは「我が国に於ける明末清初黄檗天竺様式を伝えている代表的な建造物として崇福寺内一峰門と同寺本堂。我が国に於ける洋風建造物（教会）最古の物として大浦天主堂の三棟である。他に国指定重要文化財、民族文化財等があり其の説明もあった。確かに長崎市は九州における文化財保存の宝庫という感を深くした。

〇地方史の研究、長崎史の研究については明治十九年八月長崎区長に任命された金井俊行に始まっている。（長崎市制施行は明治二十二年四月一日から当時は長崎区長といたった金井氏伝記に次のように記してある。）

長崎史の完備なきを憂い銓暇・府津を検して史料を渉獵し諸家の記録を請うて遺漏を充たし刻苦数年明治二十年十一月に至り長崎年表三巻を著し且つ散逸せる古文書を区役所に編集し後世史家をして倚る所を知らしむ。

〇明治二十七年四月県知事大森鐘一を中心に荒木周道、田中岩三郎、安中半三郎、西道仙の五人、古文書出版会を設け毎月一回、長崎古文書を刊行する事に企画、その第一編として西川如見の「長崎夜話艸」を同年五月出版。非売品とある。但し会員には会費十五銭で配布している。

〇また同年五月には市内新橋町に長崎文庫を設置、同六月には同処に県立長崎図書館を創設。現在地に同図書館が移転したのは大正四年六月、大正天皇御即位大札記念の為めとある。

一、長崎市を中心とした史的研究の団体として長崎史談会が生れた。五月二十六日発会式を長崎県立図書館で開催、機関誌として発表。顧問

伊東長崎県知事、富永長崎市長、永山県立図書館長、古賀十二郎、福田忠昭、新村京大教授、武藤長蔵教授他、会長・佐藤正俊、幹事・林源吉・藤木喜平・津田繁一・浦原春夫・渡辺庫輔・神代祇彦他。

〇今月ご寄贈いただいた書冊
『長崎談叢 第百輯』長崎史談会より。第百輯の記念号として実に内容の充実した論文考だった。大田由紀女史の「オランダ万歳」。平岡修二先生の「皓台寺羅漢石像群」他すべてが長崎史研究の新資料として大いに参考になるものであった。

長崎歴史文化協会 研究室
TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

